

**立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)**  
**大学院学生研究**  
**2017年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			文学研究科	教育学専攻
<b>研究代表者</b> (2018年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科教育学専攻 博士課程後期課程1年		粕谷 圭佑 印		
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名		
	文学部教育学科・教授		北澤 毅 印		
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・	人文	・	社会
			<b>個人・共同の別</b>	個人	・ 共同 名
<b>研究課題</b>	教師・児童生徒の「関係性」理解に関する相互行為論的研究				
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科教育学専攻 博士課程後期課程1年		粕谷 圭佑		
<b>研究期間</b>	2017 年度				
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円				

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、「教師・児童生徒の関係性」が、日常の実践者たちによってどのように理解達成されているのかについて、見通しを与える記述を行なうことを目的とする。そのために主に映像データを対象にした相互行為分析を行なった。本年度の助成においては、「学校的社会化」に関する先行研究を踏まえ、小学校6年生で生じた「お説教」場面を分析した。この本年度の研究成果によって「教師・児童生徒間の関係性」について、学校的なやりとりが求められる中での、子どもの相互行為能力に着目する視点が拓けた。まだ並行して実施した小学校と幼稚園での調査も順調に展開している。今後これらを踏まえて、より明確な問題設定のもと調査・分析・発表を行なうことが今後の課題である。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 人間関係 } { エスノメソドロジー } { 社会化 }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 申請時からの研究の展開**

本研究申請時には2つの調査プログラム、(A) 生徒の「関係性」が観察可能になる相互行為形式の記述、(B) 教員による「望ましい人間関係」を目指す生徒指導実践の相互行為分析、を予定していた。

(A)に関しては、本年度は、調査協力校(公立高校)との関係づくりの段階であり、訪問時のフィールドメモの収集に終始した。今後ともフィールドとの関係は継続する。また、卒業生へのインタビュー調査も予定している。

(B)に関しては、前年度行った調査で収集したデータから、「生徒指導」として観察できる場面に焦点化し、そこでの相互行為の特徴を抽出することを試みた。実際に分析したデータは小学校6年生の教室で生じた教師と児童集団とのやりとりであり、この研究経過は日本教育社会学会大会(2017年10月一橋大学にて)で発表した(発表題目:「授業場面で実践される生徒指導の相互行為分析:『学級内ルール』の運用場面に着目して」)。学会発表では本研究のデータに対してフロアからも多くの反応があり活発な議論の場となった。このことはデータの興味深さと更なる分析可能性を感じさせるものであったので、以下のような論文化を行った。

**2. 小学校6年生「お説教」場面の分析**

先述した小学校6年生の場面について、学会発表でのフィードバックを元に問題の再設定と分析の精緻化を行った。それまで「生徒指導」実践として捉えていた場面を、学校特有の「お説教」場面として捉え直すことで、そこでの教師・児童間の相互行為の組織化がより詳細に記述できるようになった。こうした方向性のもと、学会発表の内容を論文化した「児童的振る舞いの観察可能性:『お説教』の協働産出をめぐる相互行為分析」を『教育社会学研究』に投稿・採択され、第102集への掲載が決定した。

論文の内容は次の通りである。本論文では、学校の「お説教」場面において、子どもたちがいかにして場面に即した形で「児童としての適切なふるまい」を組織しているのかを明らかにし、そこから「児童になる」こと、すなわち「学校的社会化」のあり様を検討することを目的とした。その際、サックスの社会化論を参照し、子どもの相互行為能力としての「観察可能性の提示」と「カテゴリーの理解」に着目した。分析の結果、「お説教」場面では、児童らは、教師によって方向付けられ、教師によって想定された反応を提示することによって、自らを「お説教を従順にうける児童」として観察可能にし、「非お説教」場面や「お説教」が収束に向かう場面では、教師の想定外の反応を提示することで、「教師と親密に話す児童」として、自らを観察可能にしていた。これは、児童らが学級というローカルに組織されたカテゴリーに結びついた活動と期待の複層性を把持しているということである。こうした分析結果を踏まえ、本論文では、子どもが学校の中で「児童」となる「学校的社会化」は、個別具体的なクラス(=教師と児童集団)の日々の営みの中に埋め込まれており、日常の実践的関心においては、「観察可能性」の調整が適切なものとして前景化していることを指摘した。

**3. 小学校1年生と幼稚園年長を対象にしたフィールド調査**

本年度の研究発表の主要なものは上記の通りであるが、同時に(1)小学校1年生学級と、(2)幼稚園年長級を対象にしたフィールド調査を並行して実施した。これら調査の成果は今後、学会発表と論文投稿を中心に発表する予定であるが、調査の一部には本助成が関連しているので、以下、現時点での研究成果を報告したい。

(1) 小学校1年次学級でのフィールド調査: 関東圏公立小学校1年次学級を対象に2017年9月から2017年3月現在まで10数回、学習支援を兼ねた参与観察を行った。本年度の調査においては、フィールドとの関係づくりの初期段階にあったため、当初、ビデオ撮影は行わず、参与観察とフィールドノート作成のみを行った。その後担当教員及び学校長から調査協力が得られたため、2018年3月の調査ではビデオ撮影を行った。こうした調査を通して、学

## 研究成果の概要 つづき

校的社会的化の、とりわけ小学校段階の初期の様子を観察してきた。現在の調査状況から推測できることとして、小学校1年生の秋段階で、子どもはすでに児童としての振る舞いをかなりの程度身につけている。それどころか、そうした振る舞いを相互に監視し合う様子(例えば教室が騒がしくなった時に「静かにしてください」と声をあげる、など)も頻繁に観察できた。そのため、児童的振る舞いの獲得に関しては、より一層春の入学初期段階での教師と児童とのやりとりが重要な契機となっていることが予想される。その一方でそうした振る舞いは、運動やピアノの技術のように「徐々に出来るようになる」種類のものではなく、非常に短期間で子どもの振る舞いを变化させる質的な転換があるかもしれない。こうした仮説を基に今後の調査を展開していく予定である。

(2) 幼稚園年長級でのフィールド調査：関東圏私立幼稚園年長級を対象に2017年11月から2017年3月現在まで5回の訪問調査をし、すべて映像撮影とフィールドノートによる記録を行った。本調査は上述の小学校1年生の調査と並行して行ったこと。年長級の日常活動からは、遊び中心の時間割を構成していることや、担任教諭のピアノによってゆるやかな時間幅で子どもらを統制していることなど、「幼稚園的な」要素を観察できた。一方で、既に幼稚園年長の段階から、「朝の会」「お弁当の時間」「お話の時間」「卒園式の練習」など、厳しく振る舞いの統制が求められる場面にも出くわした。これらはまさに前学校における「学校的な」振る舞いの表出であり、従来の社会学用語で言えば、「児童」への予期的社会的化であると言える。本調査で観察できた幼稚園での教師—園児間の相互行為には、学校的な振る舞いを検討する上で重要なやりとりが数多く含まれていると想定できる。これら収集したビデオデータの詳細な分析は今後の課題である。

## 4. 海外の「いじめ研究」

本助成の計画段階で明示していた内容ではないが、「生徒間関係」に関連する研究として、アメリカ合衆国での「いじめ」に関する研究を行った。現在、報道や書籍で、「いじめ」として訳される単語は“bullying”であるが、「いじめ」と“bullying”は当然ながら概念の使用のされ方に色合いの違いがあり、とりわけ社会問題としての「いじめ」を国際比較的に検討する際には、単純には「いじめ」=bullyingとして捉えられない概念の差異があると考えられる。こうした点に注目し、本年度前半はアメリカ合衆国のbullying対策法の成立過程と、2010年にマサチューセッツ州で発生したフィービー・プリンス自殺事件の報道について調査を行い、その成果を「アメリカ合衆国における『いじめ』問題：bullying対策法とフィービー・プリンス事件報道に着目して」として公表した。本論文は「いじめ」と“bullying”の比較研究を行なう準備作業として位置づき、日本同様、bullyingと「子どもの自殺」が結び付けられていく過程の一端を示した。ただし、今回論文化しきれない範囲で、bullyingと「子どもの死」を結び付けて語ることに反対するアメリカ国内でのbullying言説の特殊性も判明しつつあり、今後更なる展開が期待できる。

## 5. 今後の研究展開

以上の本年度の研究成果から、今後の研究展開がより明確になった。まず、「教師・児童生徒間の関係性」に対してより明確な問題設定が可能になった。小学校6年生、小学校1年生、幼稚園生という、学校文化における異なった段階の子どもと教師のやりとりの類似点と相違点に注目し、大人との相互行為のなかで、子どもがどのように相互行為能力を発揮しながら、児童や園児として振る舞っていくのか。このように問いを立てることで、経験的具体的な場面から、「教師・児童生徒間の関係性」にアプローチする方途が見えた。さらに、今後小学校1年生と幼稚園年少の入学・入園時の様子も調査する予定であり、児童・園児としての子ども、また教師としての大人というカテゴリー関係が立ち上がる場面を捉えられる可能性が高い。こうした調査を展開しつつ、具体的な相互行為場面から、多様な教育活動に関わる知見へと拡がりをつくるのが、本研究の今後の課題である。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①

粕谷圭佑, 2018, 「児童的振る舞いの観察可能性:『お説教』の協働産出をめぐる相互行為分析」『教育社会学研究』第102集.

②

該当なし

③

該当なし

④

粕谷圭佑, 2017, 「授業場面で実践される生徒指導の相互行為分析:『学級内ルール』の運用場面に着目して」(I-10部会 学校と学級, 研究発表 I), 日本教育社会学会大会発表要旨集録(69), pp.98-99, 2017年10月.

粕谷圭佑, 2018, 「第9章 アメリカ合衆国における「いじめ」問題:bullying 対策法とフィービー・プリンス事件報道に着目して」『いじめ問題の解説:混迷からの脱却を目指す実証研究』平成25年度～平成29年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書(課題番号25285238, 研究代表者:北澤毅), pp.100-113, 2018年3月.